

今週のメニュー

■トピックス

◇「塩ビものづくりコンテスト2011」 展示会

ー東京・名古屋・大阪の展示会に多くの方が来訪されましたー

塩ビものづくりコンテスト実行委員会事務局

■随想

◇古代ヤマトの遠景（57）ー【倭国の朝鮮半島との関り（5）】ー

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇「塩ビものづくりコンテスト2011」 展示会

ー東京・名古屋・大阪の展示会に多くの方が来訪されましたー

塩ビものづくりコンテスト実行委員会事務局

「塩ビものづくりコンテスト2011」で選ばれた受賞作品・製品とともに、惜しくも入賞されなかった応募作品についても、応募者の了解を得て、各地の展示場で公開展示しました。

表彰式の翌日7月7日から3日間、東京六本木のA X I Sビル地下1階シンポジアで展示会をスタートしました。全体のプロデュースは審査員をして頂いた熊谷さんをお願いし、白を基調とするモノカラーな会場に白い塩ビ板と透明パイプを組合せた展示台が作られ、受賞した作品と製品がキャプションとともに見やすく展示されました。来場者は約360名にのぼり、その40%がデザイン関係の方、40%が業界関係者、残り20%がメディアや一般の方でした。



東京会場

受賞された方が家族や友達を連れて、作品の前で記念写真を撮られたり、ビジネス関係の方が受賞された作品や製品に加えて、公開された応募作品のファイルを熱心に眺めていたり、終日賑やかに会場を埋めて頂きました。中には、軟質塩ビの柔らかな感触を活かした手作り用のディスプレイ容器に使いたいと言われる方も居られて、ビジネスの機会が生まれています。



名古屋会場

翌週の7月13日には、日本ビニール商業連合会の勝山会長のお世話で、名古屋駅前の三協化成産業(株)別館5階での展示会が開催されました。ここでも約120名の来場者に熱心に作品を見て頂きました。

準大賞を取られた名古屋市内の高校生も来られ、受賞風景や作品制作の過程を纏めたスライドに見入って、先生はじめ関係者で今回の受賞をあらためて祝福しました。

更に、7月19日には、大阪科学技術センターの地下1階で、関西地区の展示会を開催しました。台風の余波で生憎の雨でしたがここでも来場者は約130名にのぼり、今回の展示会での来場者総計は610名になりました。

準大賞を取られたもうひとりの主婦の方も、兵庫に里帰りされていたこともあり、お母様と見に来られました。また、一次審査をパスした作品を最終審査に向けたプロトタイプに仕上げることにご尽力頂いた竹村化成工業(株)の竹村社長様に感謝状を授与する式典を行い、お集まり頂いた皆さんの拍手で盛り上げて頂きました。



大阪会場



感謝状授与

各地での展示会を通じて多くの方々と触れ合い、あらためて塩ビ素材の可能性が広がったと感じています。この「塩ビものづくりコンテスト」が継続して開催され、日本のものづくり活動のきっかけになることを、関係者一堂願っています。(了)

(公開された作品をご覧になりたいビジネス関係の方は[実行委員会事務局](#)までご連絡下さい。)
関連記事：[「塩ビものづくりコンテスト2011」 審査発表&表彰式](#)

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（57）－【倭国の朝鮮半島との関り（5）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

<広開土王碑>（3）

【倭の新羅侵攻】

次に永樂十年問題である。倭兵の新羅侵攻に対する永樂十年（四〇〇）の広開土王の新羅救援問題である。ここで注目されるのが、五万人もの歩兵・騎兵の派遣である。これが事実なら、倭国・百濟同盟軍のほとんどが新羅に侵攻したと考えない限り、この数は理解できない。高句麗は全力を挙げて新羅を守ろうとしているからである。倭国同盟軍が事実として、それほど大量に新羅に攻め入ったとすれば、何のためかが問題となってくる。倭兵派遣の目的は百濟復興のためであり、このことで手一杯のはずの状況の中で、新羅に手を出す余裕など同盟軍には無いはずである。従って、この碑文の記述には実際問題として論理的に理解し難い内容となっている。



広開土王碑文（部分）

天来書院刊行「広開土王碑」より転載

では現実はどうだったか。おそらく、百済の諸城を奪回するための戦いの中で、同盟軍の一部が勢いに乗じて新羅の領域に踏み込み、幾つかの城を抜いたのではなかろうか。従って、永楽十年条の解釈としては、五万人の高句麗軍の派兵は基本的に百済領域内の倭国同盟軍に対して差し向けられたものであり、新羅からの申し立てによる一部同盟軍の掃討作戦は、付随的に行われたと考えられよう。このような解釈を支えるのは、碑文の内容が、

「倭人、其の国境に満ち城池を潰破す」

となっていることである。この場合の国境は国の境界域と理解されるからである。

従って、碑文にある新羅領内の城の攻略は、百済の旧城だった可能性もありえよう。また、先（[＜広開土王碑＞（1）](#)）に示したE、F項の文では倭のことしか出てこないが、これは倭兵が戦闘の主体だったことと、反撃に転じた百済のことは記録に残したくないとの思いが高句麗側にあったからではなかろうか。

次に高句麗軍が倭兵を背後から追って、任那加羅の従拔城に至り、ここを降伏させた^{くだり}行であるが、この「任那加羅」が何処を指しているのかは問題となる。先ず任那についてであるが、これは金官国内の倭国駐留所の地名とここでは考えているが、倭の存在感が加耶地方で大きくなるに従い、この任那が既に拡大使用されるようになっていた可能性がある。倭国における「大和」と全く同一のケースである。

従って、任那加羅の解釈としては、任那と称される大きな地域の中の加羅国と解することが可能となってくる。この場合の加羅は高^{こりよん}霊を中心とする地方と解釈することが出来る。このように解釈すると、高句麗軍は加羅国の一つの城である従拔城を落としたことになる。なお、任那加羅を半島南端の金官加耶とする説もあるが、百済軍がある程度復活しているとの前提に立てば、高句麗軍は南の倭国軍と西方或いは北方から百済軍に攻められ、挟み撃ちにされる可能性が出てくる。従って、そこまで彼らが深追いしたとは考えられず、高^{こりよん}霊辺りまで南下したと考えるのが妥当であろう。

次に興味が引かれるのは、高句麗軍が歩兵・騎兵五万を繰り出している点である。このことは倭国同盟軍も同様であった可能性が高いことになる。この場合、百済軍に騎馬兵は存在していたとみられるが、倭国軍に騎馬兵がいた可能性は低いのではなかろうか。先ず、騎馬兵が北方の高句麗軍に存在していたことを前提にするなら、ここの戦いを続けていた百済軍が、その存在を知り自国軍に取り入れたとするのは当然の成行きである。これに対し、倭国にはもともと馬は居なかったとされ、多くの古墳から馬の骨が出てくるが、全てが比較的新しく、弥生時代の馬の存在は否定されている。

このように見てくると、高句麗軍と戦った倭国軍は騎馬隊の出現に驚くと共に、その機動力に眼を見張ったに違いない。五世紀に入ってから、帰国兵が中心となって倭国内に急速に騎馬のシステムが整備されていったのは当然のことといえよう。

次に倭兵数の問題であるが、高句麗軍の五万人が正しいとすると、倭国同盟軍もこの程度は存在していたと考えられることになる。仮に同盟軍が幾分少なくて四万人とすると、このうち半分程度は倭兵で占められていたと考えてもよいのではなかろうか。百済軍は、

一度は高句麗軍に敗退しているのであり、短期間に彼らの戦力が回復したとは考えられないからである。このように考えると倭国は二万人もの兵を百済救援軍として送り出したことになる。百済が敗退したとの報に接してからの派兵となれば、百済国家の再興が掛かっており、この程度の兵数は必要と倭国が考えたとしてもおかしくは無い。というより、当時あっては倭国として出しうる最大の兵力を百済救援に差し向けたのではなかろうか。

最後は、永楽十四年（四〇四）の倭寇のことであるが、これは新たに派遣された倭兵ではなく、三九九年に派遣された救援倭兵が残留していて、彼らが百済軍と合同で帯方郡に侵入したものと考えられる。ところが高句麗にしてみれば百済軍は、存在していないことになっているので、倭兵のことだけが記録されたということである。

以上、広開土王碑文について検討してきたが、総括すると次のようにまとめられよう。

- 一 青年広開土王に率いられた高句麗軍に大敗した百済は、倭国との軍事同盟に基づき倭国に援軍を要請したが、自国の立場上の不利を補うために質を入れた。この要請により倭国は急遽準備し、三九九年に兵を半島に派遣し、失われた百済の多くの城を百済軍と共に奪還した。碑文にある辛卯年（三九一）の倭の渡海は倭国の実情からも、文章解釈上からも、事実としてこのような渡海はなかったと判断される。また、永楽十年（四〇〇）の倭兵の新羅侵攻と高句麗軍五万人の派遣は、倭兵が本来百済救援のための出兵であることから、この条は論理的に無理がある。従って、ここの高句麗軍五万人は旧百済領内の倭国・百済同盟軍に差し向けられたものであり、倭兵の新羅侵攻は一部の兵による新羅国境付近への限定的なものであったと解釈される。次の永楽十四年（四〇四）の倭寇の帯方郡侵入は、これは百済救援の倭兵が残留していて、その兵が百済軍に協力して行ったものと考えられる。このように理解すると、倭国が半島に派兵したのは三九九年の一度だけであり、そのときの兵力は二万人程度だったと想定される。 —

（つづく）

前回：[「古代ヤマトの遠景」（56）－【倭国の朝鮮半島との関り（4）】－](#)
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 編集後記

塩ビものづくりコンテスト2011の東京での展示会に行ってきました。準大賞の2作品は全く違う塩ビの使われ方がされていますが、どちらも感性豊かで賓が感じられ存在感が有りました。名前の付け方にも感心させられます。その他の作品にも塩ビの持つ様々な特徴を捉えた作品が多く驚きました。塩ビの新たな需要が掘り起こされ、塩ビ産業の活性化・発展に繋がればと思います。

前後しますが、表彰式の後の記念パーティーで準大賞を受賞されたお二人の挨拶がありました。お二人とも受賞の喜びと作製に至った経緯を語られましたが、すなおでさわやかなご挨拶をされ感激しました。お二人とも受賞おめでとうございます。今後のご活躍を心から祈念いたします。（ももっち）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp